

## 令和7年度第1回大阪府障がい者施策推進協議会文化芸術部会 議事概要

■日時 令和8年2月26日(木) 10時～

■方法 大阪府庁別館6階福祉総務課会議室にて開催(オンラインシステム併用)

■出席委員(五十音順・敬称略・◎部会長、○副部会長)

○今中 博之 社会福祉法人素王会 理事長

上田 假奈代 NPO法人こえとことばとこころの部屋 代表理事

◎小田 多佳子 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 理事長

鈴木 京子 ビッグ・アイ共働機構 アーツ・エグゼクティブ プロデューサー

田中 均 国立大学法人大阪大学大学院人文学研究科 教授

中川 圭永子 企画集団A-A'主宰

### ■概要

議事1 文化芸術にかかる取組み実績等について、意見交換等がなされた。

議事2 「第6次大阪府障がい者計画」の意見具申について、審議いただいた。

### 議題1

●文化芸術にかかる取組み実績等について説明。

・ビッグ・アイで実施している事業についての補足。

カレッジについては、表現をまず体験したい、未体験の人が「演劇はどんなもの」「ダンスってどう体を動かすのか」という、入門の部分として表現のコースを実施。演劇では、前年度より、A委員に講師を依頼。ダンスでは、障がいのあるダンサー2人が講師となり実施。障がいのある人への指導は、これまで障がいのない人が指導者になることが多かったが、A委員のこれまでの経歴・経験を活かしながら『障がいのある人が主体的に表現の世界で関わっていく』ことが、ここ2年で重要だと感じた。

スペシャルワークショップでは、AKANE氏の振付を八木橋氏が講師として振り入れをした。最終的に万博会場で披露したが、これまで障がいのある人の活動の場は、どちらかというと、福祉的・支援の場等に限られがちであった。しかし、近年では、障がいのある方が主体的に、大きな役割を担って活動するようになってきている。主役は、カレッジで指導者を務めたが、9歳でカレッジに初めて参加し、ダンス活動を長年続けており、色々な形で成果が出ている。

また、この3年間で、府の万博イベントのステージにおけるオープニング作品を制作。トップをめざして活動する人と、ダンスを楽しむことを希望する人を公募で募集し、全参加者70名のうち半数以上が障がいのある方であった。重度の障がいのある方も同じように参加した。障がいのある多くの方が大きな舞台に立つために必要な環境を整えるために、ダンス経験のあるなしに関わらず障がいのある参加者に伴走する支援者も公募し、舞台が実現した。

コンテストは毎年実施。今年も発表の機会として、9組が発表。アートの企画展では、カペイシャスのように高みをめざす取組とは異なり、すそ野を広げる取組として実施。作品の評価や販売することを目的とするのではなく、日々の創作活動の中で、支援者や家族、周縁にいる人たちとの関わり、その人自身の背景や表現を掘り起こしながらの展示であり、9年目を迎えた。毎年たくさんの方に来ていただくが、関東や九州など地方からも来られる。高みをめざすものではなく「支援の中でのアート活動とは」と問いかける展示会に

なっている。

相談件数について、劇場や文化施設からの相談もあれば、個人、保護者からの相談も多い。参加する・させることへの不安や、本人の思いを伝えるという相談も多い。その際はビッグ・アイでの事業を伝える。近年、大学の論文のテーマにして書くため見学を希望される問合せも増えている。

・オープンカレッジの報告をききたい。

・表現コース演劇の方で2年、講師をしている。障がい当事者が講師をすることについて「どうなのか」と思う人もいたかと思うが、ご自身に障がいあり参加されている人はひょいっと、飛び越えられている。ほかにワークショップをしたが、いいと思うのは色々なことがボードレスなところ。健常の方もいるが、ジェンダーも性別も関係ない。これまでも実施しており、「場」ができてからだと思うが、障がいがある人かどうか全く関係ない。

また、他のワークショップとまた違うのが、参加者が発信するまで待っているところ。急かす人や飽きる人もいない。1年目は寝ている人もいたが2年目はない。全5回で仲間意識が出てきていると思う。表現を楽しむだけでなく、行くことが楽しみになる、居場所的な部分も大きいと思う。そして楽しい気分の中帰るが、支援されている親御さんの方がもう一步を乗り越えられない。「もうちょっとサポートしてあげてとか」「ここが問題なのでは？」と、見守る・サポートする方が待てないと感じる。

併せて、先ほども出たが、もっと上をめざしたい人、お芝居をしたい人も出てきている。どう受け皿を作るのか。行政がやるのか、やりたいと思う人たちでつってっていくのか、そのステージ来ているのではないかと感じた。

・保護者の方に空間に馴染んでもらうのは、永遠の課題と感じている。長年参加されている方の保護者は馴染んでおられるが、色々言われる保護者は、保護者自身がこの場に慣れていないと感じている。保護者の方に『この場所がいい空間で継続して連れてこよう』と思ってもらう仕掛けがいる。見学するとさらにその声が増えるため、あえて見学させないことが仕掛けの一つ。苦手になっていることも、保護者がいないと楽しく取組んでいることもある。場が温まり、最後の発表を見てもらうことで「こんなことができたのか！」と思われる保護者もいる。

・保護者として思うことは大きく2点。一つは、共依存というとても重要な問題。子どもの自立が非常に難しく、反抗して親離れをしてくれる子が少なく、その分、親から子離れもできずに共依存になっていくというのは、知的障がいの世界ではとても重要な、非常に重い問題で、こういった面でも出るのかなと思う。大切にしないといけないのは、意思決定支援。本人の意思を尊重することを、保護者にも伝えながら親も子も支援していかなければならない。障がい者の親になるという学びの場はないため、保護者が学んでいく場がなく、情報提供もない。保護者も含めて意思決定支援を進めていくことが福祉現場でも大きな課題と思う。もう一つは、芸能の子役の親は、みんな関わり方が深いと思う。ぜひ講師の方にも頑張っただけなら大変ありがたい。

・自身の取組みとしては、共依存の親子が参加の場合、「お母さん」ではなく名前呼び、参加者になっていただき、サポートではなく、離れて一緒に発表してもらうなどを行った。逆に依存が強すぎるとこの方法は

使えない。離すことができるような「一人になるようにする」という工夫は行った。

・**Art o Live** のエピローグ展示会を見た。障がいのある作家・ない作家の作品を、テーマごとに一堂に合わせ展示され、美術の展示として非常に素晴らしいと思った。映像や他の資料もあり、新たな作家・作品の表現を知ることができてよかった。この事業は、万博に向けた現代アート発信事業で、今年度で終了と書いており残念であると感じた。実績の説明の際、国立美術館の学芸員との訪問について触れられていたが、詳しく聞きたい。

・この展示会の方には公立・、国立の美術館をはじめ学芸員の方も見に来られている。その中で、これまで交流のなかった学芸員の方と関わりができたため、カペイシャスが繋がっている福祉施設への見学や、現在係わりのある作家の作品の展開方法等について、次年度、万博の事業から經常の事業に移すような形で継続していくと聞いている。

・新たな展開、可能性を開いていくことを伺えて、すごくよかったなと思った。

・カペイシャスが今年度で支援が終わる、終了すると聞いたが、その辺はいかがか。

(事務局)

・事業が終わるのは、6・7年度と実施してきた万博の事業。經常事業は今後も継続して実施するため、すべてが終了するわけではない。

・安心した。この部会はそもそも、すそ野の広げるお仕事、カペイシャスが頂、市場化をしていく。山高ければ裾広しみたいなことを言っていた。それが他の自治体にはない、大阪独自のアピールポイントであるということ。スタートはその地点にあったということ、再度知っていただきたいなというふうと思う。

・ビッグ・アイでのアート工房がなくなったことで、堺の補助金への申請を挑戦された団体がいる。継続して事業を実施することが難しい中、他の自治体や助成金等を活用しながら継続されるのはとてもいいことだと思う。

・このような意見を踏まえて、来年度の事業の方を実施していただきたいと思う。お願いするところ。

議題 1 続き

● 今後の大阪府における文化芸術を通じた施策についての説明。

・舞台芸術の分野では、すそ野の部分を広げることが重要、一方で、アート以上に舞台芸術は難しいところもあるが、もう少し上手になりたい、大きな舞台に立ちたいという要望、次のステップにつながっていける機会を考えないといけないと思っている。

「場」を作ることもちろん重要であるが、自分をもっと高めたい、自己肯定感を高めたい、さらに挑戦したいという気持ちは、障がいがあってもなくても、みんなが持っているもの。次のチャレンジできる場所が必要になってきていると感じている。ビッグ・アイはオールバリアフリーの施設で物理的な環境面では何の問題はないが、大阪は縦に長く大阪北部や中央部に広げていく、普及させることも、一つの課題と思っている。

劇場法の指針を改定するという、国の施策方針が示されているが『社会包摂』『共生社会』『バリアフリー』といった観点が重要視されている。次の指針でもこれらの視点がより明確に位置付けられると思われる。大阪府下の公共の文化施設、美術館においても、国の施策の方向性に合わせて取組を拡充していく必要性が確実に高まっている。大阪府下の文化施設が今こういった社会包摂に関するところを、美術・舞台芸術の分野も含めてどこまで対応しているのか具体的に知りたい。茨木市や堺市が対応しているのはわかっているが、創造の部分だけでなく、鑑賞の機会っていうところも含めて、府下の文化施設がどんな取組をしているか、どんな考えで取り組んでおられるのか、具体的に知りたい。

・事務局でそういった行政関係の舞台芸術、アートも含めて特化した活動や舞台等やっている府内市町村等の情報は持っているか。

(事務局)

・今のところ調査は行っていない。国が行った調査が一番詳しいかと思うが、府内市町村、公立の劇場といったものを網羅されたものではないというふうに認識しているので、行政調査の中でどこまで協力いただけるのかわからないが、行政がそういった調査をするというのは一つだと思うところ。

・国の調査では、二年前の **16%**が **34%**へと、社会包摂の事業が倍ぐらい増えている。大阪も合理的配慮が義務化され、社会的環境に変化があるなか、増えていると想像はするが、実態が見えづらい。

・肌感として、大阪府の施設等については伸びていると感じているか。

・横ばいに近い伸び率だと思う。理由としては、大阪府内の施設からの相談がほとんどないことが挙げられる。茨木市、堺市など相談があるところは色々実施している。他府県の相談はすぐ受けている。

・ちなみに他府県で一番伸びていそうな他府県はどこか。

・特に九州、なかでも福岡県。福岡県はアーツカウンシルも今後設置されるので、行政としても力が入っている印象がある。

・福岡県が伸びた要因はどこにあると感じているか。

・福岡県は行政が要因であると感じる。併せて、劇場体験プログラムがあり、アクロス福岡という県立のコンサートホールに県職員や関係者が見学にきている。こうした動きの中で、コンサートホールが中核になって九州ネットワーク事業を立ち上げ、県内の様々な文化施設が集まり横つながりで事業を起こすようになってき

ていることも一つの要因だと考える。福岡県は、ビッグ・アイも協力させてもらっている。

・どちらかと言えば、文化行政が音頭を取って引っ張っているということか。

・県立のコンサートホールが旗振り役になっていることが大きい。また、ネットワークには音楽・演劇のホールだけではなく、博物館等も入っている。

・ネットワークの中には、大学関係者が入っていたりするのか。

・毎回ではないが、九州大学の長津准教授が来られたりする。九州交響楽団等、芸術のいろんな分野の方たちが、年に5回あるネットワーク会議に参加される。会議だけでなく、博物館と劇場音楽堂って呼ばれる文化施設が連携してワークショップを実施するなど、いろんな分野がつながった事業もできている。

・指定管理者が管理する施設が増えている中、その指定管理者に仕様を提示するのは行政になるため、行政の考え方が強く反映されると思う。

話が変わるが、刑務所・出所者の方と関わりがあり、その中で3、4年アートの取組みを行っている。障がいがある方が、犯罪に手を染める・再犯してしまうことが多く、数年前の調査では発達障がいや、そうした障がいがあることが調査でも出ている。でも、彼らに対してのそのアートへの取組みはこれまでされてこなかった。先だってイギリスの方がホームレスの方の調査をした時に、**95%**のホームレスの人が大きなトラウマを**1**つ、**75%**のホームレスの人が大きなトラウマを**4**つ持っているという結果が出て、そうしたトラウマに対しては、やはりアート、文化芸術は効果があると話をされていたこともあり、こうした文化芸術の活動の中に、困窮していたり、犯罪を犯したりするような人たちとアートの結びつきについても、取組んでいくことができればいいと考えている。

・先日 **B** 委員も一緒に出席した障害者文化芸術活動推進員有識者会議という国の会議があり、この会議も **10** 回開催されているが、伴奏者の話が割に大きく出ている。文化芸術と支援と両方を持った人というのが必要であるというのが、全国から意見が出たところ。その人材育成はとても大事だと思っている。**C** 委員が言われた今まで社会福祉として「こぼれてしまった人」。その人たちの見つけ出すのも伴走者であると思っている。この伴走型人材育成と大阪府は記載しているが、このことについて、意見や重要性とか、差し迫った問題等はないか。

・最近、ソーシャルアートコーディネーターという言葉が生まれている。そうした視点の人たちも育成されると良いと思っている。

・東京のアーツカウンシルも規模が大きい。社会包摂関係もしっかり取組んでいる。東京でよく聞くのは、アクセシビリティコーディネーターやアクセスコーディネーターといった、伴走的な役割を担う人材である。どこまで担えるのかという課題はあるが、とくに資格があるわけではなく「現場と一緒にやってきた人たち」であると思っている。先ほどの九州の話になるが、現場を一個作り、そこにみんな入ってきて経験する。障がい者の人と

一緒に鑑賞する鑑賞支援。ビッグ・アイでいうカレッジが人材の育成の場にはなると思っていて、ここを人材育成の場として、表現の場と同じくらいのボリューム感をもって実施していくのがいいと思っている。ここ数年、アシスタントとして入ってはもらっている。個人的には、座学の講習を1回程度実施して後は現場で経験を積むのが大切と思っている。いろんなサポートの仕方というか、配慮の考え方も含めて経験を積まないとその人材って生まれないなっていうふうに、感覚的に思うが、C委員も現場支援、A委員も現場を経験されておられる中で、どう考えられているか。

・そう思っているし、今発言したのも、刑務所アート展とか出所者アート展、刑務所でワークショップしたりとかしたことも含めて実際関わっていて思ったこと。社会福祉の方と、芸術分野から、どちらからも関わっていくような、ちょうど重なるような機会がもっと作れるといいなと思った。

・年間に数校、大阪府内の文理10校、と言われる学校に通う高校生たちがそこに今日のような話をする。その際実施するアンケートにびっくりした。40%ぐらいは文化芸術の支援、そういうものの職業に関わっていきたくていう子がいる。文理10校の子どもたちの多くは、大阪大学にもたくさん行かれる。大阪大学で文化芸術と支援を被ったような取り組みとか授業とか、興味があると思うが、実際はあるのか。

・いろんな学部で取組んでいると思う。人文学研究科の臨床哲学研究室。森田かずよ氏が現在そこで大学院生として研究されている。またCoデザインセンターでは、釜ヶ崎で教員が学生と一緒に表現活動をおこなっており、「カマボール」というイベントには私も参加した。ほかにも、人間科学研究科での取り組みもあると承知している。人文学研究科と総合学術博物館が実施したアート人材育成プログラム「中之島に颯を放つ」で、檜皮一彦氏と協働した事例も挙げてよいかもしれない。

・国の会議も一緒だが、この会議でも申し上げるとおり、人材育成っていうのは本当に肝だと思っている。そのほか、なければ本資料の修正等はないとしたいがどうか。

・最新技術を駆使して、とあった。視覚障がい者当事者として、万博でも視覚障がい者向けにいろんな取組みがあって、点字ブロックに貼られた2次元コードを読み取ると音声案内され、歩けるようなというような技術が出ていたと思う。そういうのを踏まえて、絵画とか、舞台芸術に関して、最新技術を駆使したもので参画しやすいようにするということが。言葉だけじゃなくて、具体的にどういう取組を想定されているのか伺いたい。

(事務局)

・最新技術を応用した障がい者の新しい芸術鑑賞手法の創出という事業を、来年度予算案として挙げている。議会で予算承認された際、来年度障がい種別による芸術鑑賞に関する課題の調査というのを委託事業として実施予定。課題に対して、解決できるような技術をどの企業が持っているのか、技術の調査についても同時に行い、障がい種別と技術のマッチングをさせ、その中からいくつか、実現の可能性があるようなものをピックアップして、鑑賞手法のモデルとする、方向性を決める、というところまでを来年度の事業で考えている。どういった手法を想定しているか、ということについては調査次第になるが、例えば視覚障がいの

方であれば、「絵を見る」手法は現時点では「触る」と「聞く」という、触覚と聴覚を使った観賞手法があるかと思う。触るという部分でいうと、例えば3Dプリンターという最新の技術を使って、そういったものを安価に早くできるという手法ができないか。聞くという部分でいうと、学芸員や作家インタビューを通じて学習した生成AIを活用し、対話型鑑賞といったものを、皆が等しくできるような手法ができないか。5年かけて実装できれば、と考えている事業である。

・そこまで進むのであれば、ぜひモニターをやってみたい。やりたいな。

・保護者の立場で言うと、すそ野を広げるという部分が一番身近になる。B委員も言われていたが、大阪は縦に長くて、私は堺在住のため、ビッグ・アイの恩恵を非常に受けており、あまり不便を感じていないが、府下全域の方と話をすると、ビッグ・アイが遠く、心の距離もあるように感じる。ビッグ・アイを飛び出して事業を実施いただいているものもあるが、普段から芸術活動しているような何かに所属していないが、子どもの頃から絵を描くのが好き、作品作るのが好きという方の保護者が自ら個展をされるということを時々聞く。宣伝の手伝いをするが、それを見た別の保護者が「実施したい」と言われるが、そこでビッグ・アイに相談するとここまで認識が行かない。また、実施されている保護者は実施するまでのプロセスについて知っている。展示会についての知識がある方が身近にいたり、行政の方から意見をいただいたりしている。ビッグ・アイだけでなく、市町村で、大規模じゃなくていい、例えば会館の部屋1つ、個展を開く人がお金払って借りるけど、展示会のノウハウを伝えることができれば、個展を実施することができる人が増えたりすると思う。そういう取組が、どう文章でここに記載されているのか、教えていただきたい。

・この点は、中間支援機能に関わるものと考えられる。当事者と行政、地域の文化施設等の中に入って支える機能。大阪の南で活動をしていると、北の方の活動はすごく気になる。北の方から来られる方もいるが、圧倒的に数は少ない。心理的な壁もあるかもしれないが、障がいのある人が遠方に長時間かけて移動することは、すごく負担になると思う。最初に言った中央部でどう展開していくかについて、ビッグ・アイで場所を借りて実施するのではなく、市町村や文化施設と連携しての実施。文化施設も突然相談を受けても答えられないと思うので、文化施設の中で、そういう人材を育てていく必要性はあると感じている。今吹田で、定期的ではないがアート工房を実施している。大阪の北、吹田市内でアート活動を行っている事業所をメインに、ビッグ・アイがサポートしながら、吹田にアート活動できる場所を作ろうとしている。ビッグ・アイがすべて実施してしまうと地域に根付かない。中間支援としてどうやっていくのか、どこにアプローチしてやっていくかというのが、重要だと思っている。

・個展をされた方がこの1年間で4人いた。振り返ると、通っている絵画教室に開催場所、社協にボランティアグループの紹介を受ける等、開催のためのノウハウをレクチャーされていた。そういう人に繋がらず、「作品は持っているが、家で描いているだけ」という人は、他にもたくさんいると思っている。今、B委員が言われたように、市町村の方にレクチャーできる人が増えていけば、すそ野の部分、表現することができる人が増えていくのではないかと考えた。そういった活動をしていただき、ありがたいと思った。

・今、47都道府県に障害者芸術文化活動支援センターが設置された。ようやく揃った。大阪府はビッグ・

アイに入ってもらっている。それでも敷居が高いと感じるのか、今のご意見に繋がっているのではないか。市町村だけでなく、障がいのある方が通われている社会福祉施設の中で伴走支援ができる人材を作ることが大切だと思う。そういう人材を育てるのは高校であり、大学であると思っている。福祉施設の中でそのパワーを育てていかなければ、相談して行ける場所が「大阪市にあるよ」「大阪府にあるよ」「国にあるよ」と言っても、なかなか動けないのではないか、それが現実ではないか、と聞いていて思った。

そのほかはいかがか。

先ほどの最先端技術の応用の部分について、文章的に付加できるか。もう少し具体的に表現できるようになれば、分かりやすいような気がしますけど。

(事務局)

- ・では少し表現も足すようにする。
- ・その他どうですかいいですかね。

一同首肯

・今のご意見踏まえて、次期計画策定の際や今後の事業実施等々に反映をしていくということをお願いする。

## 議題 2

### ●「第6次大阪府障がい者計画」の意見具申について説明

・5つ目のパラグラフの3つ目の黒い点の「市場において、芸術的社会的評価が適正に行われる環境づくり」について、これまでずっと使われてきた表現だと思うが、「市場への挑戦」に相当すると考える。その場合、作品販売だけでなく、舞台芸術だとコンテスト等もっと大きな舞台への参画も含まれると考えると、広い意味で市場って言葉を使っている。また、社会的とあるが、作品の販売にとどまらない評価のことと考える。その場合この表現はこれでいいか。美術的価値が評価される場面に出ていく、というような広い範囲でとらえて問題ないか。

(事務局)

・府の、特にアートの分野については、芸術作品が認められるという一つの表彰的な意味で「市場での販売」を事業の真ん中に据えた経緯はある。ただ、ご指摘のとおり、芸術作品として評価されるということが、販売だけにとどまらず、今回万博で示したように、デザインとして使ったり、実現はしていないが美術館に展示されるということも、作品の評価と考え、それを含めて市場における評価と表現している。

・「市場において」と文頭にあるため、マーケットと認識してしまう。ただ、次に「社会的評価」とあるためマーケットだけでないことはわかるが、「市場や社会において」と書く必要があるかどうか。削除して、「芸術的、社会

的評価が適正に行える環境づくり]等とするのはどうか。

・「販売」に重きを置いていることが大阪の特徴だと思う。市場という言葉は残してもいいかもしれない。非常に重要な言葉だと思う。

・国の指針においても「市場化していく」とあるため、流れとしてはおかしくない。文頭にあるため、誤解を招く感じはあるかもしれない。

・「芸術的・社会的評価が市場においても適正に行われる」としてはどうか。

(事務局)

・そのように訂正する。

・「文化芸術分野において、障がい者の主体的活動を支える伴走型支援の育成」について、文化芸術分野でとらえると、少し異なる。あくまでもアートと福祉が両輪で動かしているため、文化芸術と支援において、など福祉的な要素を少し加味した伴走型支援がいるということ。

芸術分野に長けた人を、福祉分野に参画してもらっただけではうまくいかないと思うが、いかがか。

(事務局)

・「文化芸術分野」の伴走型人材の育成に限定しているように見える可能性がある。福祉的要素も含めた文化芸術分野であり、文化芸術分野においてという文言を削除しても意味は通じるのと思うがどうか。

一同首肯

(事務局)

・では、そのように修正する。

・中間支援の機能について、ネットワークの構築や技術的な支援、情報提供も具体的な中間支援と言える。どのような機能を強化するか、もう少し明確に記載をしてはどうか。

・より具体的に中間支援の内容・中身がわかるような文言を追記し、再度ご提示させていただいてよいか。

一同首肯

**その他**

●第6次大阪府障害者計画策定スケジュールについて説明。